



内外新报

自第廿号  
三十迄

西垣文庫 特  
文庫 10  
7350  
3



特 文庫10  
7350  
3

西頭文庫

内外新報第廿一號

慶應四年閏四月廿四日



○  
四月中旬の以休勢邊の港を出帆志くし高船と云  
ふそゆりたる所人の活し又出帆の前日十月廿  
の軍艦其港に入津せり其中又士官多く乗る艦之居  
たりし其船の奥に九條殿下其外の者をおくも  
た多し船形も然るに仙臺より會津退討としく兵と  
出しまるに其兵白川を以て岩陣せし秋余津の勢を  
以らひ仙臺勢敗走し多し故に廿四日と申し援兵を催

復せん多めの大坂よおむくりの赤金と借ら終し  
よし

○去年九月改め江戸市中の人口戸籍洞帳の写  
一町方支配場所人越人較多

四拾万七千零六拾六人

世帯数拾万二千五百廿九

但し家持地備店備石仕等迄の負較

内 男 五拾万八千九百八拾九人

女 五拾万八千五百零七人

一寺社門外町人越人数多

八万二千九百九拾七人

世帯数五万零七百廿九

内 男 四万零九百四十二人

女 四万零四百八拾八人

通計五拾二万八千四百六拾三人○竈数拾二万二千八

百五拾九

内 男 六万九千九百零五人

女 六万八千八百六拾七人

所出稼の者

男 二万九千九十七人

女 一子零拾九人

右の尚歳迄の人負あり世化支配遠の町人終役者毎町宛あり武家の家來の世教あり

○

申介新聞中四号は裁せしる者客の熱代括囊新と記し或人の一封書亦我社中は投與せり始は新聞の甚盛大あり或賀し終は各報の重複多き或責むを言實は理ありと雖ども撰者一手に出ざるは以て亦之を如何ともする每きの新聞成社之を每きも是せり或を介篇の固より申介の羽翼にして報報亦内介の教吹と

を極めく復出と娘ふと雖ども於偶合ありを免むは况や頂者に湖新聞遠近新聞新々事略の類筆出しく既も六七種の多きよ玉きり安んぞ終く之を防くは或得んや然きども其甚しきは玉く我々全文を棄換し之を撰漢の訳稿に託し或は英佛の写本と繕たり遺意の圖画を挿入する者ありとすくは撰者如何とや當り新聞報告の旨報を失ふの事は是を以て是を以て稗官不心の書と同じかしくむ惜むるの甚しきありや我輩忠らくは世禁一旦止まれば相倣ひ遂は根柢は傳人として厭ましむるの由あり各局の衰滅なきは傳

つゞきのつゞき然るに則今日の盛なる城又喜ぶる一と雖  
 ども安んぞ明日の衰へざるを保せんや是も我書の深  
 く憂とまるるもろろ異くの將來刻成の日互ひに各  
 率と交易し有無を参照せんを彼は倭は倭のありの世は  
 省き世は裁まるる彼は剛を勢めく公正にゆし踏襲の  
 弊ゆるしめを則倫敦府百六十海局の多きも亦企て  
 く而して終るべし豈困化の一盛るはるかや他を一時  
 並刻して冥符暗合するの世候を以て規を可らざる者  
 あり是我書の名社幹事とせむ不似としく保せし或人  
 の厚意に答ふる不似形を

○同日月十一日出福崎よりの表状

仙臺侯人救出湯に八百人程相固め當時合戦を以て白川  
 表の本宮に二本松にありのちかや相成の別に中山石  
 邊迄少く合戦ありしを唯今少くは合津勢願内坪あり  
 しとす取引取者重く相固めは松子替く合戦を以て外  
 に相馬侯二率松に口は傑出し之を妻侯白川にへ傑出しの  
 中津勅使に之位殿英又官軍薩長勢凡そに八百人程内  
 退討としく清川にへ出張統るは山形上の山の人数傑  
 出し又相成は白川少く我率相始り官軍方不勝利く中  
 日天臺落城市中八九分通り焼失殆又官軍清川に引

以交八日約より長■と中地より庄内勢と相違合戦相  
 始り右又付山形柳倉、天童等大勢操出と相成ゆへを定  
 めく大合戦と成り中巻くやと山形の中東山形本庄  
 何事も至交市中不踏家賊及具丸かへ付女子老少の支  
 く在方の退せゆ中九日上杉衆人殺し人殺引率し板  
 谷御里より高不登以津通行衆約一泊十日夕方津家  
 老毛利上総凡二百人程あり高不登止宿今約出ると相  
 成仙臺は津出く執又津高く鳴よの世度合津征伐く津  
 丸投として津出張と中より又津高く多ふい和睦と相成  
 いたると一日大勢死なす

羽州天童藩城の洋流才女二号又出ん

○同日十月十四日或る藩士の活し

加勢之家英信の大名十萬金津返討を命ずる是より  
 藩の先頭中津不書く節有る人殺固め場不引拂ゆ事此  
 前右の節相分り金津返討先鋒に 修付ゆよし未だ津  
 信の致さぬゆいゆい最も尾羽兵隊高田を離るること  
 吉里中津の不まきり居るゆい付殊く外不登不都合  
 のよし高田く板子ありい高田の藩を人も金津に向ひ  
 以者い有るまどくとの噂は津産作

元是德川股肱臣、何心阿諛苟全身、他時若遇天兵起、屠盡□□城裏人、

作者不詳

○

内外新報第一號より第七號まで至るゆへに校正出來し付近日再板合本に以て賣出し可申也。



# 内外新報

第十二號

定價八分

内外新報第廿二號

慶應四年閏四月廿五日

○信州善光寺よりの来状

四月十七八日の以越後より田原荒井宿へ逗留の晩迄兵  
越後路より信州松本を通り又付宿々人馬往立無滞  
出し尤も御用意痛の候へ亦百人程用意致し是れ松  
本宿有之坂山原松代宿役人々存し執事主へ海出の  
中より幸多作より吉田家に直接し其相報は然る不  
廿一二日以晩迄兵坂山城下へ繰上りて是れ又於て  
戦事了結旨談判し相成本多家を修葺す意致し寤ま松



代に援兵を相討ひ坂山城下脇より小隈門扉門落合に  
門首に渡取兵隊馳走方より引揚ひ至程去回勢出強右  
門を隔る安回と中雨へ陣死女八日明云時色合大砲小  
銃打掛け戦車と相成馳走方大砲を遠く敵戦し坂山  
城門おと引退城破渡し坂中述い至本多勢一時又城  
門を閉き砲發よりびに故馳走兵悉く敗小城下市中へ  
放火し行きの逃去に申す向又去回勢取を死度し屯  
坂城下へ到至活徒ども首を以度相犯し同城内隊隊長  
録之に相成り馳走方死傷又十人解松代方即死走人手  
負走人し中松本と回尾お等し人救退し操出し以得た

去回勢一手あり戦車勝利し申す續き越後路へ人救走  
向残兵退討右諸藩より回へ浪佐内通行を致し度掛  
合と相成り去回度為成り馳走松代内隊より敵へ敵  
重あり而して関門を建固め殺し相攻めし中

○志州為羽藩屋書

兼り津屋中より通う平右衛門後津不審之助寄り入京  
江止に執於京地也 治出在雨あり慎行を以て去道  
或る存為歎然去月廿四日在下表出立日廿八日関取に  
到着後怯仕居し雪月晦日入京江免以時津達し馳石  
川宗十郎折々通其者依之去月廿四日不出去る云

日京者仕り院中或は世院に属すといひ

四月十七日

猪垣平右衛門家来

小菅根市左衛門

○補遺

安房家の士水戸街にあり 大君の御旗印を見らるれば打  
上戸細代の侍駕籠あり侍籠をとけ黒備細御紋付の侍  
羽織を穿石侍腕籠を穿遊侍槍を本らるる其を極を見  
せ多く涙を流さるるを於し侍先へ杖拵体く者制止勢  
相懸ひのこはく侍佐の中ありの勢懸ひ者形く是去河  
りる平伏存をいよし

○同日十一日出山取上りの来状

庄内より繰出しし人取

白石慈恩寺塔

惣大将 高二千八百石

酒井兵助

軍大将 高二千石

石原藤助

軍師

加谷野清助

先陣

中村清藏

天童に在

中村次郎

新徴組子人附添

佐沢浩

堀 平右衛門

石井重助

新徴組又百人附隊

山形に使者

白井庄助

無 仁九郎

熱勢凡三人

右の人殺六指越志津本道より、意恩方、佐沢右又ヶ取、陣元、白井仁田、篠越村、邊門岸、日の丸の旗、押立て

砲の音、回く廻しく相聞也、然る亦、又臺方より、門岩坊  
に出張互ひニラミヤヒし、白脈合ニラミヤヒ一古口、経打合ニラミヤヒ、亦、双方二人宛  
人足傷付、以、中かくく山形より、門岩坊、二番、手繰出し  
長崎より、遠藤村へ陣元、至、柳金勢と一子、又成り、相聞  
也、辰より、元、左、右、内へ、右、同、意、致、し、以、故、より、官軍、又、對し  
より、ハ、其、多、を、見、也、不、中、出、し、固、め、の、より、より、日、を、送、り、佐  
て、官軍、に、屬、し、以、極、子、より、相見へ、由、端、あり、双方、意、志、  
發、見、以、中、以、く、庄、内、方、より、空、砲、打、也、以、故、より、山、形、勢、大  
又、驚、き、滅、又、玉、之、め、砲、發、以、多、し、以、故、より、付、左、内、方、之、際  
以、及び、大小、砲、打、かけ、遂、又、戰、争、と、相、成、り、山、形、勢、士、分

武人討死柳倉是怪人即死外又三人討た是庄内に  
 此武之人討死者之由中刻古河の落合と中受以之  
 戦闘庄内穿手武百人あり之人討死山形勢又人討た  
 是敗軍引死中由刻庄内勢天童に押寄せ城の裏  
 手より大砲打掛ケ以故一藩必死と覚悟を極め切出  
 以執事殿之方火の手熾ん又相見へ以へ死タすは打  
 合城下家中焼立思ふ候又戦ひ中庄内勢焼逐以之  
 老の森百町を焼拂し相成り天童家老吉田大炊重俊  
 又亡人候之故兵七人討死以由庄内衆寡敵しが一  
 先重幸又引上り酒井方之指人程戦死織田方七八人

即死者之先ハ勝利と中幸又津庄の但落城より上り  
 以故略々我れ以由中庄内方も人殺を集め長沢  
 陣を引死中由仙山候へ攻寄り中様不又付仙臺  
 へ官軍より退り不并を以之津進し及び日六日筑物  
 勢八十人程笹谷峠を并越し山形光助より番陣志又  
 仙臺勢七日宿通あり日六日十人程引り退り官  
 軍到着以相成り夜下桑野達摩方村迄之光助奪よ里  
 出張宿之洞屋所に相固め庄内方へ打入り様不以  
 津庄の生後大砲の音に及び程お寄へ庄内村高野  
 村天童を儀越村に火の手揚り未だ勝敗

之相分不中ハ

○最沢家より中末更ハ風岡書

當月十二日戸塚家ハ里程在系所回トテ所ハ八五  
不尔人隊既の上し走人切腹介ハ之人ハ多分同筋ト  
中事右ハ去る九日日光表より逃帰更ハ若ハ付世分  
脱走隊長より切腹更ハ付ハ中ハ以沙産ハ



内外新報

第三十三號



内外新報第廿三號

慶應四年閏四月廿五日

○同日十月十日日出豫漢宿よりの來狀

本月十二日夕刻相州吉野浦と申邊に晚走兵凡そ二百  
人許り船より上陸し多一箱根山を打越通行し相成右  
へ浜津に掛合の筋有りと申風聞に由度いよしく小回  
系より六百人程人殺出張いそいで申

○同日十月十六日出同宿よりの來狀

小回系は各越以晚走兵三百人程同本寺院に屯集い多  
し右人殺の内行是く多し以て又打越通行し高岩通行

百十一  
有之今十六日也又延使返中座也又大藏平塚へ同  
人殺し内任越族宿以多一居以介八王子在又ハ高比賣  
甲那越知村に脱走隊之百人許里集り居以屯小田原又  
所在の同経以之守都官房總等之我率上之相也里以者  
の申右隊より世為掛合く筋有之小田原に在哉先方返  
善以身合致して相成ふと百姓どもハ十少退く人殺相  
増以申以中座也

○ 仁和寺上書才女四号之記載を記す

因月六日小業上亦不意の事又遭へり女四号又出以

○ 中津原歎願書

已忍懐白甘中上ハ徳川□□候今般 朝意又育き以執  
と以く大道を及く天罰を甘業候又以く甘忍入以然る  
以時年二條城引掛大坂城に滞在居下過激く佳積く然  
撫存在以中座不果也之日 一件又立到り以我全□□  
の本魚あも無く執也候果亮□□の不却来より我配重  
以候今更寸分の中沢也無所産以居居遣以実以く忍懼  
く玉又其高く然る事□□儀東由以候深悔悟後慎哉重  
以心 朝廷に恭順く及相立方と敢て固西言棄地有之  
向て速く為引允候初より兵備を不復祖光懐慕の地也

勢居存在天。下生靈塗炭。若一留一此。以之備之。天  
體之世。仍以上。介他之志。每之。後之。顯。然。見。聞。仕。以。義。以。清  
庭。以。問。何。事。在。之。情。實。清。涼。察。誠。下。正。怒。德。門。家。從。宗。以  
來。之。勤。勞。之。也。多。為。思。百。天。地。交。響。之。思。百。之。以。之。寬  
大。之。清。而。至。也。仍。付。下。以。不。予。之。系。之。難。有。仕。合。之。甘。為  
呂。遭。幼。弱。不。肯。前。後。之。清。時。合。不。甘。亦。知。衣。極。之。候。中。上。以  
才。在。也。入。以。傳。之。於。德。門。家。之。恩。顧。筋。之。義。子。也。有。之。以。於  
之。何。不。不。然。傍。親。坐。視。世。為。附。眾。之。奏。少。清。庭。以。中。之。付。後  
之。清。後。中。上。以。伏。之。於。之。愚。者。之。復。清。而。至。也。清。而。至。也  
誠。下。之。極。位。血。守。款。願。以。以上

二月三日

奥平義徳守

○四月廿九日

尾藩

田宮如雲

松平肥後守孫及運相幕主尾張以下邊江夷迫里以下  
相聞へ以願主幕大納言以下追討也 仍付以問其方清  
暇以下百其力成功を遂成極也 仍付以察其  
城内國事勢局判事以下免也

○伏見よりの上状

高田家老中板倉次郎と中若先生と京師へ在居以下



此程生藩勅 且く道相を以て用城に致し有請甚多を以て  
以付主人に十圍津清に仕と誓ひ申候に後長を主人宛  
加州本村九右衛門に申者於合之人附添四月廿四日  
系地と致候に

○宇都宮屋書

土佐守在可登御宇於宮表に強居候事高直に候居候  
事去る八日東山道津尾督府より津尾より板倉津候事  
板倉より助板より後越前より津尾に相成候事高直に  
申候事百廿四日申上候事以て

戸田大佐守家末

四月十七日

何某

○補遺

一板倉御所願不備申松山城に候前勢打向い用城候事  
其前家老徳田恰也百人を引率し伏見戦事へ加り候  
哉く疑義有らば直撥六ヶ巻に故程に辯せ及し遂に切  
腹の多し赤心と表し士分或百人を侍前候に候  
但し備藩の恰の義人を感し俸金之助へ之百又格  
石の墨付を与へしとぞ

一松山岡城に若初段に一戦候事及形勢に事侍候  
儀漏れ隨ひ恭候又決定し在城に士分二百人農家へ

百一十

階居の多し藤中越人殺六百人の如く備前へ移せし者  
二百人の光山は晩老の者二百人を去りて下りて自來  
者又二百人件と云藤中妻子の夫を縁者へ役りて中

○四月申系教より諸藩にのり布令書

今般王改所一新殊文尚長閑東進軍あり相成小事以付  
元幕府の制を以て法度家族等之家來て定府存在に  
而して國元在在りては速に引取れ終付支勿論右清沙法  
と不得以て道相を疾速に引取れ向も有る共は相成へ尤も  
次第より就ていし一教引掛又は只今居殘る事細の  
事來り十二日と云内外事勢局へ十出の振込出の事

但十二日以引掛の向の事有文より出の事

○補遺

○三月某日長州平兵隊建白之ケ條 有極川宮  
表出れ

一 母方同業 所親に候不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>遊休 所出與<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>  
てい萬民發擾の<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>に思<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>も 一天<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>也  
海人氏善惡を<sub>レ</sub>福<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>  
曾國大社の基と<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>也  
一 外國人 所<sub>レ</sub>膝<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>介<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>掃<sub>レ</sub>攘<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>  
以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>惟<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>事 内<sub>レ</sub>各<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>事

一 天下に改事の必徳川家に向し愚弊の諸藩を存儀  
 小介文の委し何と三百年來大改仕来り天下に人民  
 為休有るを以今 王改優古中之公家諸藩を入改事  
 有ると雖ども其人殺つて多く費へ文に為伏する事  
 委す新く何つとも世傳の委を以ていつは法藩命を  
 有き自國の相固め天下の法をめ不相成の百早  
 と徳川家へ改権を乞の如く又法由し委するの忽ち  
 大札の甚賑おの有る治要文に委す事



# 内外新報

第二十四號

定價八分

内外新報第廿四號

慶應四年閏四月廿六日

○仁和寺上書

嘉彰仁和寺相續齡十三の秋ニ過キ勅書を甘し出家  
 得度爾來一黙々法燈を挑くと雖も中々全く佛界  
 への世に長ざる及びおしく文字を勉むと雖も  
 空しく光陰を送るの之を知らばまされ勅旨に  
 遠んとするを厭適を難し慙愧之情日夜止むべし法  
 への去る九日ニ奉り因り願ふ還俗を免さるは是任  
 り命を蒙り恐懼屏言職勢を就と雖も老後かゝ弱

冠と過ぎ才力空匱はる懸懐とをきまのり方今 皇國  
改權一以 朝廷より在る不備を裁一日に期會実の万  
世不拔の業を不空如何に存するに作 皇國今日  
の形勢に玉りし事外國人未港よりより記す今是を  
挽回するの道は西洋各國に政体事情を知るに所り  
中間に所き親する者ありと雖ども在りて人未だ航の  
の事を聞かば下りしと通せしむるを凡百の事  
のそまざるの委あり嘉敷自ら熟慮して曰く公聞に  
育くと雖ども一言まると志るに机と燈下の微見の  
とありて天下の事行をし難し故に今且賢徳聰明と

公卿の謀を忽ち一才と挿んが皇國は航にして外國  
の情実を親親し彼の長短を洞察し然るは由りて後  
方歸化の道と聞き遂に 神あり威武と普く六合に  
輝かしめんと欲するなり嘉敷忠を 皇國に得る不  
<sup>レ</sup>可の候は此事に在る何ぞ頼く 朝廷は素志を諒  
察し遂に允裁を賜らん事を以て 奏聞宜しく入に誠  
忠誠慎慎書

嘉敷

議定中

○京師より諸藩より書達書

近來大改官の如く旧徳を去極し度く天下に 所敷若は  
遊の如く上下貴賤と如く 所改道節を致取せしめ一  
去の方嚮するをを知りて衆理を踐行せしめんとの  
所仁慈の如く在りて付諸國裁判諸道鎮撫使備藩首  
居等々所改の相成の事以て向大切に先計ひ遊邑遠阪  
去の如く至る不悞極 所統有貫徹の極迄度て相成の  
事

但元幕府の如く元初代元代官支配下はの如く度元傳  
の如く付在るの如く不致通達を於陣屋向等と如く  
宿業の如く相違の事

四月

○腫病ある者の治し

申仙道楠川宍の先の如くの事形をしとら世にハ御道節  
右右の回圃に青麦繁りて生長せ至成る日一隊の軍勢  
いかめしく装ひて世所を通りたるに農夫の馬又六疋  
打候き花を頂せしと來掛りて軍隊の先へ駈越んと思  
ひ畑中の裏路を一さんに走らしおしり盜賊の防を  
とら農氏たが誓古せしお統の音聞へたらしに彼の軍勢  
伏兵らるとや思ひらん隊長先を走し出し跡をも見  
ずよ迎去しが固より敵の如くは身を退しに之處り棄

老し若し抱ふれまよ何れんうけきしと其意の村童と  
 も笑ひし其の懐病の士へ今の世はもろくそと成人  
 の借らししとせど懐病も習たしはく勇士とせざる者  
 と見ゆ漢古之國の以拓孝長とつふりのけり城中に居  
 るしつが俄かに敵の攻寄る勢を聞や吾や此世おの  
 き急よ一室に駈ひて戸鎖をわし取より夜具打被り  
 伏居多う合戦本日終にしと稍く一面を吐せり其時日  
 月の影出くを馳走する其次の日ハ戸口を吐く我の消  
 息を聞たりて又日又あくる乃ち自身掩を角ふく花の邊  
 園にしと九妙春秋に思ふ多うさきバ懐病形うとく一

生弱きもろくけを必走甲快者と侮る多うとて

○小栗仁右衛門屋書

秋本宗小栗上野介去る正月申土着船く通るに於て  
 以付二月廿八日知り下上御拜馬御權田系上出立土着  
 舟を以て去月廿九日官軍松平右亮板倉重計政松平  
 藏丸凡人救之百人程上の倉室を係出し是月廿日上野  
 介士長持田村に挿入在人数く内室を以りめ所賊し以  
 て小栗上野介父子征伐致して中旨惣督岩倉殿下知る  
 旨相達して又大小砲共々相後旨相達し以て付引渡し  
 又一條の来る之日高橋に相越して中旨掛合に付同月

四日同人七の時以同不白恙仕旅家致し同不あり同日  
日帯刀出出中角熱智より紅冷渡以執以く則又一英  
以石連以家来之人く大小を揚け同日九の時多傍  
町其以不白之下引連是白海に居居暗く相付以へども  
文以取く節も多く牢を安へ一日石連是以以対死越以  
安後右七人く内中間之人の相居中角出役く者中達  
し又一初め之人在斬首致し中間之人共吟味中入牢中  
付以角中渡入牢致し以角同も形く多傍所安圍方と中  
寺以く官軍より出牢中渡し則出牢致し以又付右く者  
多傍町白出以角控田村く者以出會上野介安吾取り以

取同人候先時六日朝四の時時以上の倉河原に於て文  
以取く節も多く上野介始め家来之人斬首致し以以上以  
て同人不持く諸道奥家来ども不持く節も残らば若  
遣是致し何方へか持越以角取是驚き入る場より右の  
者内寺人在ゆり出府前書く始末中圍以同不死殺世降  
清原中上以以上

閏四月十二日

小栗上野介局守致り

小栗仁右衛門

○

今月上旬に以會津家老仙臺の先陣軍門へ降伏謝罪と



しき石出の以付白石陣よりあつて會議に及ぶ迄  
達有る後諸藩を収束近く白石へ森會の空仙甚より  
中來る

○某がの君卯月の初め飛鳥の國人ものし  
臨ふよし取まら

吉くろろろろを流波の山にわくくきんをくをひ移を  
ぬくはあそかみ  
よき人志し

三月朔日會藩柏原源兵衛 天朝の歎願參與衆應對  
の始末并榊原清記歎願書号才廿五号に出す

# 内外新報

第千五號



定價ハ多

内外新報第廿五號

慶應四年閏四月廿七日

○德本世子江松平泉妙より留守居と以て出  
し書面字

外臣某極く後て德本侯の世子君友右執事以捧筆仕り  
已思ふ舊法候と云百年末右文左武原く名教清遠奉  
遊既以是利氏熄滅く候と云清再興 王幕共以正道と  
云乃其於徳川清家以云と云初百年と今日以云と云  
野中頼實以 皇國と清法以云乃成天下奉と奉と  
水斗と其以云と云 王政清復右天下清一新く相柄

世子系刑法事務之重職清選任事乃蒙以所成以天下  
 大幸鼓舞舞踏之至以不臨有者就之其去清門下  
 殊論仕以至此也清在門下其死之犯之殺之若上仕  
 行率親安之眾清憐恤之故下外臣某思懼哀憐之情實清  
 無顧及下也以此不世之清大恩難有仕合身而相  
 又今殺德川 大君不測之大眾乃為素東淑山之幽閑  
 居側帝憐愷後之 天裁之乃為清以所成之以此  
 哭之以此憐之也前頃之不免妻妾仕以亦 大君清事元  
 來清德後之清德慎以乃為在以此清家清相續之其也清  
 望之清後見之其より只管也 王之恩有以此之其清

清相續相成以是才一清及人等之清と其相清相  
 續之後將軍職身之清固輝相成以共 王命不以此  
 以清受職相成以形苟也心中棲む不有之 ありて  
 軍之推職誰も求之て受之其清後之 清及人等之  
 才二と其存之其後清不徳之 往清く及躬清自責元以將  
 軍職清辞退政權清返上之 故以玉よりて何とて其  
 上以我之百諸侯清指揮も不相叶 神祖清創業之六指  
 形所以也清難也相成以事之愚丈夫愚婦と申以之也承知  
 之仕然之故之百年来之清時業一躬以之為捨矢之之儀  
 以任世行分以也 王政優在之清紀律相立 望國之清

高亮又大海以新為輝登清赤人の備代諸處之陳也  
 清採利兵之決然清英勢有之の全く公昭正大 天朝  
 清考崇清恭順之陳 聖王より之清より有之愈く頗る雄偉  
 豪彦之口以有 王操夷之唱一以類之天壤之懸隔以  
 了有之苟也及心有之よ於之の惟る國に離之職を失ひ  
 如世下業仕る者其是清及人等之志明澄く才二以清  
 彦之於東海清境疑之清間より俄に二乘清城上清退去  
 之在如何也 王命清道其積之諸臣之動搖之清法接  
 江戸表之也常く清少法有之竟に坂城に清勇退之候是  
 之清及人等之明澄之口以也彦之其後尾截去之清内

餘に付後清上洛す有之其清供先之何遠不致幸以及  
 の若無勿体も御旗立向ひより 天威咫尺清思  
 惶以之之軍之清見捨さるるに全城湯地を尋ね取  
 ち不致被獨り清東内以相成以候右に城に武門之恥辱  
 不載之上子歳之下又下有之儀も不存在く世時以而  
 至美く一も清及人者之に於るの良言を得多し然るを  
 其之等 王清恭順之清運びより右之清始末に玉以候  
 是又清及人等之志明澄く才二以清彦之相清東歸之候  
 備石備代恩顧之諸番旗士もおかしに清再奉之候身命  
 七抛ち日夜陳卒致し候とも祈知揺之清氣也也身之世

上旗旗東下より才以第一敵討ひ多に者有之に於て  
 予が首級をえ以日しとの上表に之を討てて法  
 辨恭然懐懐は管 王健を多に討てて其時以高り第一  
 及ん有之に於ての諸軍を引率し上洛 嗣下以於て  
 是曲曲を法陳正有之にともあぶなきに之を竟に其  
 後也其に既是又法及ん有之を以て之を以て法  
 法亦法恭順を為す伏罪し法陳情法を以て法に  
 法亦人貴微不仕以我六所法親征く大命下を以てより  
 一死く不垂を之に東嶽山中に幽閉法誓居天に侍き地  
 伏し是怒懼有罪と以管法一死く上に法引交諸侯の中

以乃と比旗下し士に玉皇のとを之に取て法の中如  
 何程に之を有るは我法及ん有之を以て法に  
 以有之通に法を以て之を天地神の法照覽法及情に於  
 ての毫末も有るを以て法に保案法同く傳聞に  
 定之齟齬仕り有之を以て法に去其為 王政法優  
 右天子も更始法新改く初め寧ろ不獲又法失瑞法を以  
 ても好生も法大徳民を以て法洽仕り了儀形も人民感泣  
 帰仁に孩兒も慈母を慕ふ如く法 王政の日月新に相  
 互了中法實に 皇國も法為め 大君も法附罪法を以  
 く乃の法も在問法我報令 大君如何に法罪跡法を

いとも既に殺代し將軍職を名放一旦亡格御所を以て  
以上を清無悔し清乃るを在る者亦但御令 大君の誓  
く誓いとも 東照神君 王宮に清力を以て天下を氏  
の爲め民を以て統治し不幸甚き成りて之百年に今日  
に玉いと天下を奉ふに安んずき捨ひし清勤勞上下快  
樂と日ごとく以て仁徳を以て思召徳門清家と奉  
清春願く乃るを在る者亦其刑法に國家に大典宏則  
是者く不法持御儀に如く欺に怪を以てき命を以て  
縄墨儀に陳<sup>ツラ</sup>移<sup>ツラ</sup>之欺又曲垂<sup>ツラ</sup>以てき心か<sup>ツラ</sup>以て伏<sup>ツラ</sup>之<sup>ツラ</sup>難<sup>ツラ</sup>  
に賢良明公世子徳門 大君 王宮復古と昭正と清

御意と以て清の衣冠を清補佐中の徳門清家と推  
奉下の善氏を清仁愛と為るを以て天下具瞻く不望に此  
為副のた<sup>ツラ</sup>其某多年當に清下凡と其御業の素心も空  
しか<sup>ツラ</sup>其善氏奉<sup>ツラ</sup>清恩沢を感載し仕介其某放<sup>ツラ</sup>伏<sup>ツラ</sup>續<sup>ツラ</sup>  
く罪を犯し後之言と仕介其某悚懼恐惶<sup>ツラ</sup>玉<sup>ツラ</sup>以<sup>ツラ</sup>堪<sup>ツラ</sup>  
を願首願首死罪死罪

月日

○世の中さかき<sup>ツラ</sup>以<sup>ツラ</sup>何<sup>ツラ</sup>き<sup>ツラ</sup>以<sup>ツラ</sup>成<sup>ツラ</sup>き<sup>ツラ</sup>以<sup>ツラ</sup>成<sup>ツラ</sup>る<sup>ツラ</sup>

め<sup>ツラ</sup>の<sup>ツラ</sup>世<sup>ツラ</sup>に<sup>ツラ</sup>あ<sup>ツラ</sup>る<sup>ツラ</sup>た<sup>ツラ</sup>き<sup>ツラ</sup>以<sup>ツラ</sup>か<sup>ツラ</sup>く<sup>ツラ</sup>も<sup>ツラ</sup>や<sup>ツラ</sup>古<sup>ツラ</sup>久<sup>ツラ</sup>し<sup>ツラ</sup>も<sup>ツラ</sup>

〜ゆゑに〜

よ〜

菅原か多子 上書高田侯歎願書追次刊行

○壬辰月廿九日 佐生川氏書付家

慶表伏罪之上 徳川家名に續て我祖宗以来一切

儀 恩百格別し

敵愾以因安撫に助に 佐出以事

但一城地録言に及て返るに 佐出以事

十渡

本五月朔日 兵隊掃牧野邊河を至安に於て 蚕種紙生

糸所改不し 為建印稅法取入に 成以角

大総督府會計裁判不より 此建多し 以乃以各町中

内外新報

第二十六號



廣合

不虞振子之書約厚之其力也  
辰園四月

三十七



内外新報第廿六號

慶應四年 閏四月二十八日

○閏月廿八日

德門□□水戸表上退免後後慎恭順之乃相之小令之  
 玉城相出先雖悔悟致上之ハ非常之寛典之ハ之江於  
 上相返退之ハ系上之ハ 治出ハ 敵急之旨 大総  
 府上 所沙法以付諸以進軍之官軍子之引之ケ  
 大總官為陣以振 所沙法以事

閏四月

東海道

大總官參謀

東山

水陸

奥羽

官軍隊長中

今段徳川□□隊伏謝罪事  
敵魚寬曲之涉而色紅 天裁以以付以玉仁  
安堵以極其計以致想之涉者便下為實東監察使之旨  
河沙信以事

之條大納言

後四月

河原新平

小笠原唯八

新田三郎

右月外以付附屬兵 作付以事

後四月

美里小路并

今段關東監察使之旨之條大納言 美里小路并

房東下取 治出小事

後四日

松尾伯耆

中門對馬

三條大納言為圓東監察後東下取 治出小事

治出小事

後四日

三條大納言殿去る日二日夜西撤口沙屋中

○高田侯歎願書

徳川□□從前遺失有之の事又々不妻休兄有相色に  
 おく先傳し若我事より及以付致致 行征討事 治出  
 以 天威嚴重恐懼に不堪致懼く至事也に秋條に徳川  
 氏之河以來世痛の甚長に治府に事若年不肯故技持道  
 故も不取再行極く場合に至る以て小実以て甚罷難適  
 上ハ專對 天朝申ハ徳川氏下を秋條宗以對し面目も  
 争く次第に甚毒く秋條遠方隔取再居に事故不事く致  
 年の始末穢悪取知不仕以ゆえ全□□不取辱一時く至  
 失より甚恨 宸襟に次第より至る恐懼く至て甚陳謝

極至法度以終るを又善夫と下率古と漢皆 王土以付  
 吾朝をあらわすに必ず必休と清史新相成りてハ□□天  
 地間以身の措所方と万安右極相成りてハ痛痒不問と  
 者ももも不堪憐強と甚毒况や私身とにまら實以日夜  
 痛哭仕りて悲哀不滅水難も難入口次身以何處何  
 率天地包會と大恩と以て今般と遺失 所害殺と成下  
 以極其哀歎と且徳川家席天下に大勲有と擗風休と  
 愈仁心来と大仇と掃蕩し之百年来古平と泰と家き其  
 安 宸襟丈とより来列世恭順崇敬と成 到重所窮は  
 不濟然とハ□□一身の過失と以て宗社忽諸不紀事に

相成りてハ泣血悲痛を世と其哀と作れりハ徳川氏先  
 祖以來と勲勞恭敬深と 思召り下至厚と 清仁惠と  
 多と 皇宗廟社稷永在仕り極所而垂成下ハ徳  
 川氏臣子一日系造と 大恩と感戴して世終其哀情ハ  
 六指海砂皆一と民に法度ハハハハ私祖宗以來至量  
 と 天恩と為ハ其の重照とる露以休使仕ハハハ私等  
 従来勤 王と志願厚と心掛け存在ハ其旨甚哀情ハ執  
 莫大と 聖意と以て所拜容は下至徳川氏依然血會仕  
 いたる恩と恩惠とと表如何報効して仕亦実以て感激  
 憤發向は金量受ふ福力して仕其哀痛憂懼ハ不

孫子殿其哀海英於以臣等所執成也成下其其於以減也  
減也其首領首領言

二月

○ 奥州金澤の園と陸中郡と引掛ひよ相成りい歌其地  
より内里の者も活し洋儀未と相成りい

○ 九州地方那宗一揆凡そ去第七八中人も歌其地  
付肥前と人較い退く内里相成りい中肥前産小横濱  
より内里より歌其地竹故にい

○ 世次の世次をい

か其れ〜ぬ身内人た〜るにむ〜〜り〜る〜る〜る  
い〜世次ありふり

永以子

○ 同月十三日其水戸表よりの来状

一 去月下旬の浪水府諸生方と内院本石足友於八右衛  
右衛と上獄門に相成城下町中へ右首級さ〜〜有る  
い事

○

本月十八十九廿一日今市戦争の確報を得る第廿八  
號の記を且つ地圖を出し其事實を詳かめ但し廿  
一日、闘争官軍方土兵の奮戦脱走方奇策を用ゝ遂に其  
鋭鋒を摧き官兵敗績に至るの事件を載す

# 内外新報

第廿七號



定價八分

内外新報第廿七號

慶應四年五月二日

○京師よりの來状と抄出紙

辰之日朝日會藩家老柳系源兵衛上系いり

天朝参り 有栖門家に出る

今段松平肥後守儀 朝敵の名と蒙り會し参入の事  
去肥後守に於ていそ忠を以て今 朝敵の名と蒙  
り参入の事 治出の所何れに参入の事に付肥後守に  
朝敵より参りたる由元來松平肥後守家より後之保料  
以て参りたるに付今段肥後守松平此林号を徳川

江返却了任以家路の事ハ若狭守之ハ保科家相續  
 張治村等下以之ハ士氏一考 然恩之重ハ忠勤也了  
 其是事以付世降法團屋等下並以極中出  
 系映流之善 申出少條玉極尤以有之ハ故也今返付  
 知 信出仙基信作等又合令有之ハ世方以之故是  
 之中養等之ハ國降引之存意ハ有之條へ下中出  
 以世方以之取之ハ條不相成以事  
 和系又之 河沙法之類也其最ハ故也今防我等  
 内以不有之取之ハ 皇國降部ハ其其最ハ故也  
 類信ハ今仙基信作等我等又知之ハ以之ハ今條等  
 人殺之ハ先陣ハ人殺之切筋ハ是之也之過きハ

仙基ハ本城系取以故事申以有之古ハ之 攻東過守  
 ハ今條之ハ又信ハ下古ハ之ハ 皇國ハ大抵其氏  
 陰謀ハ善ハ致之ハ古條等ハ内其款類ハ其之ハ  
 述也  
 泰興之 何ハ其件ハ以是ハ以付免ハ角由有之 國降引  
 取先條退付ハ角由ハ中出等ハ以之ハ世方以之取之  
 付十万安也  
 拍系之 古ハ之ハ如河極中出ハ之ハ由河取之ハ其等ハ  
 ハハ世之ハ國降ハ引之ハ 河沙法ハ有士氏ハ下



聞

右に通言ひきりて上下指ふ人ひきりて金澤家来し礼を願  
し出さし事

○

一友人東奥の遠事を探振し寝めく十殺衆を斬し我社  
に板興せり因て内介新報廿十一号より逐次挿入し  
まひて巻習に附

○

或る人の語しに覺れぬは遠く戦卒の所ししに晚  
老の人多し後怯く旨意はく退く事右鎮撫とし

官軍兵向ひに付支を防禦せんとし遂に合戦に成  
りし時より因て双方に衆を引くは官軍脱兵ともは戦  
地引くもいよし

○林系清記勤 王に後以付若出に款預書奉り

所下けれ

正恩以書附其類之に初先程に後ハ 清和天皇の後胤  
仁本と伊能の事休舞國志初林系郷に居後仕り林系  
次帝に即み始りて家名林系と相改り後勢州を退き三  
河國安祥へ至越へ因居仕居在り松平長親に初め  
附居仕里に以付因居仕居里に去地之河國情を初にお

かく其後臥石之指七石所願仕りし後林系六右衛門  
 の子林系一右衛門義寛永の以 新院所不附系 以  
 付江叙從子後下系任法路寺其初出格の儀より  
 朝恩と蒙り長く在系永為 以付冥加と相付以親授也  
 世と事難有依以其為と之新以山城國相樂郡相樂村  
 以初より石所加増下系初上野國又石知所  
 産以以付右返知仕り山城國又初より一取六石下場  
 部合八百之指七石所願仕り成以在系中其初以私家  
 義法路寺以男林系右平右右内之石石分依仕り  
 以然り系和義大書以之成と之系是と國學枕心是ま

和宗所出勅道其勅 是と志且久以所産と受世度其機  
 所一新の所布令也 以出以以付て以依以之勅 是と  
 義と所其と相勅也其受心其初義永人以所産と依と世  
 後上系仕り石所産寺在と隨款款仕り小身微力と  
 儀以之其思入以へと何奉前件 新院所附也 以  
 付以所中備由所産以以付 所儀系永成下相意と所  
 用其為 以付所下以と 廣大と依難有奉也と何分  
 所寛恕と所不長も成下以縁所概奏其初以成思誠  
 惶頓首謹言

四月廿日

林系清記

辨事所役所

所役人涉取次中

下札

進之涉所法之旨事付若相務更以振起 所付以

事

○同日八日元知所取引取之親書若以 所下

札之字

先甘之歎歎書甘若上卷之字一廿六日所附若處之りて

進之 所法法事付若相以振起 所付難有仕合以事若

以在に付之ハ急進 所相若為 所付以若以由所役人

執事又右由所役所之りて涉法に所存之りて 何とも甘進

入にゆとも和の家地日圓相樂親相樂村地役人居宅に

所を越し其後 所法法事付若相以振起 所付難有仕合以事若

置所存にに付若地六角室所東へ入證物屋若無潔方へ

家来去人若無 所法法事付若相以振起 所付難有仕合以事若

く之若其以同世院其何に頼着後言

四月八日

辨事所役所

辨事所役所

所役人涉取次中

下札

先を不に引取ふ若し事

○

方今我ダ新報の世に公行まゝや益盛大にしゝ寒郷僻  
邑も到らざる所く牧童漢兒も着ざる所く然るに上書  
建言の如きに至つゝの文字間了しながさき所を因るに  
二三と撥ひ附まゝの因字を以てし解まゝの俚語を以  
てし集録しゝ内外新報字類と名づけ上梓しゝ以て童  
蒙の便を發兌近きにゆく



# 内外新報

第二十八號

定價八分

内外新報第廿八號

慶應四年五月四日

四月十七日の夜日光津科野村河内郡大桑村室務方  
 と申家等善提方境内多羽に表林有之木立打越才小以  
 場下へ脱走兵凡五拾人程駕上銃を以て奮闘十八日今  
 市岩澤面の土州勢凡百五拾人程宛交代行々巡邏三ツ以  
 多し何ん程く室務方境内下を通過せし折如く脱走  
 方儀より起るを教しく砲發以及び以て官軍散く以打  
 面分日家之引越以即死七人年負六人有之申脱兵を

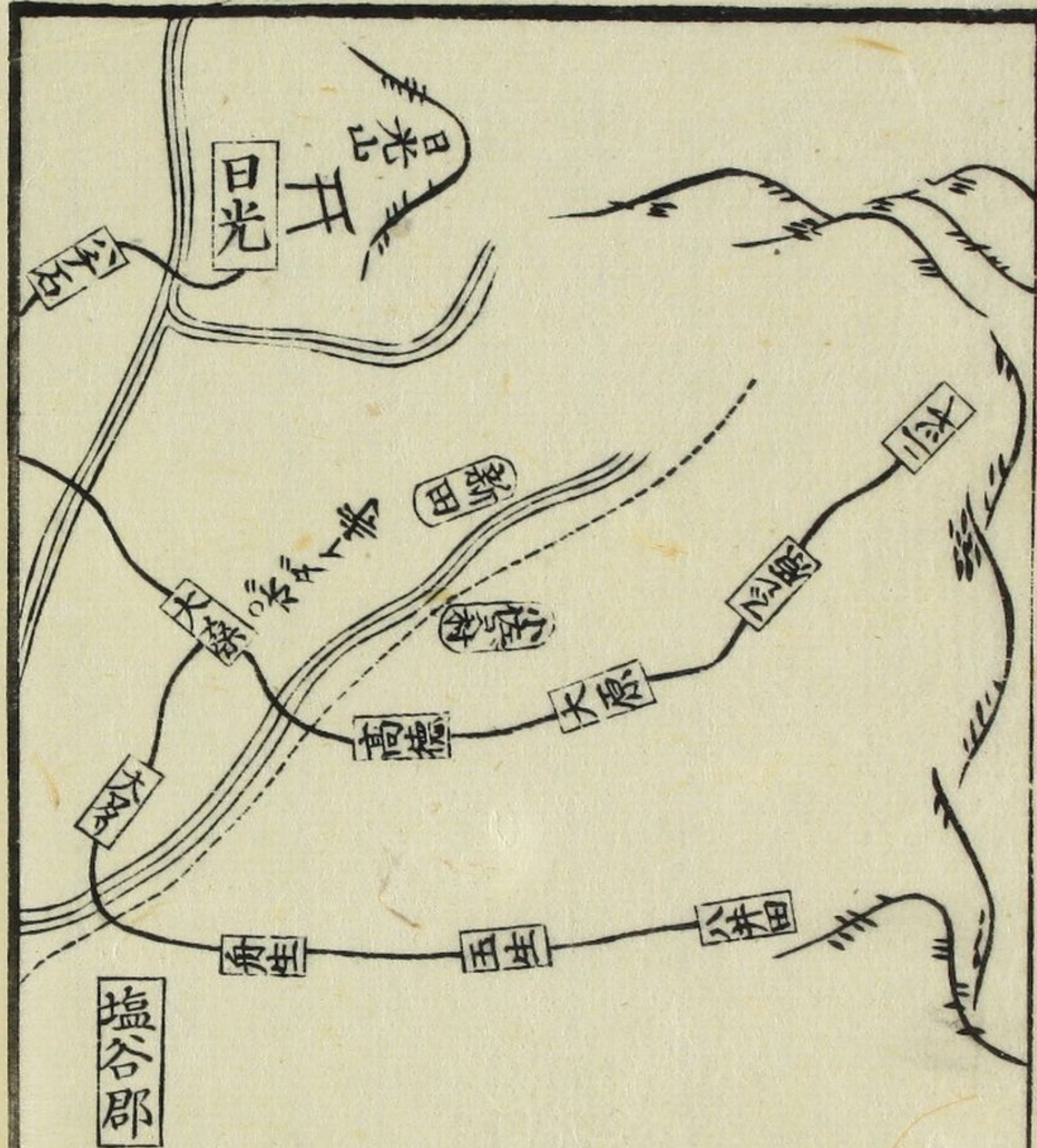
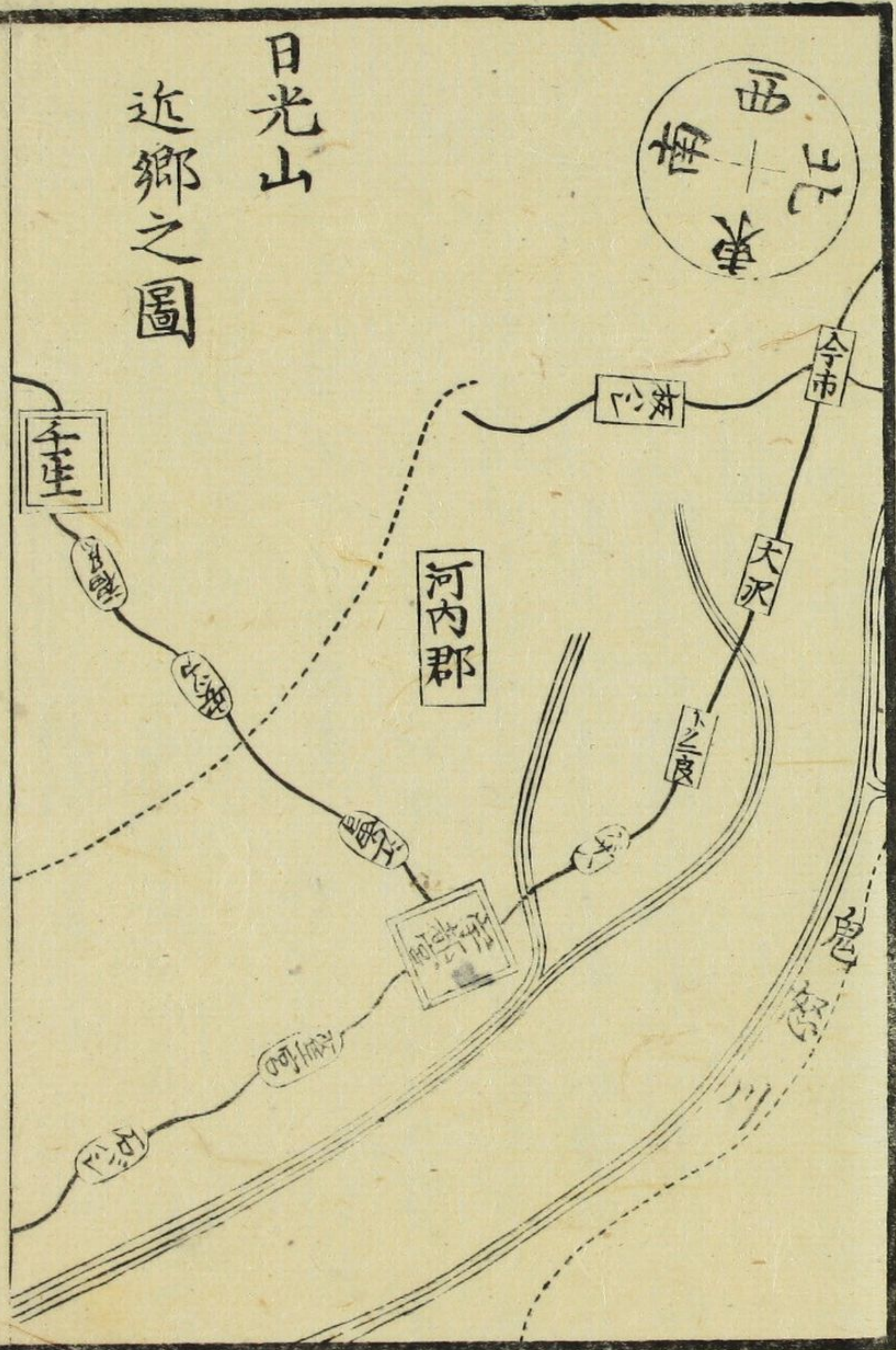
百一十

まより同郡を築新田に引揚る

月十九日初日と敗走に付去勢勢より急に早打を以て  
日光山の屯營せし彦根勢に援兵を乞ひ軍儀を狭し  
高橋と人殺合せく六百餘人許同日曉に退り出張を築  
新田に押向け砲費以多し以て晩走兵將も亦死有極  
以て一時は窮乏を以て圍攻を新小佐越村の方へ逃れ  
る所を官軍討策といふ付り此勝に幸く難免る志不  
るに小佐越を築新田を村に入合せよるどしに野原  
有る何の間はモウ後ちかき人長橋を間幅三間程のオトリ陷阱  
ニケ所掘りよるハ其の是れ後ちかき官軍此所より退

未至しが忽ち北中に陥入る愕然と驚く折しも側の  
藪蔭又も山中より伏兵透間より起る多し三方より  
取圍を打をけるよそ官軍危急におもへ之を救え  
んと後供の兵繰出せると又途中より遮ら進退自中  
ありに先鋒十餘に討あられ遂に大敗走と成り付  
死廿八人存負八十人餘是の趣極を生じ相討り以て  
まよる去勢勢ハ今市宿彦根勢ハ日光山へ引揚り本  
營に始末す初官古河に沙汰に及び退る人殺出張の  
よりに相聞也是日晚走方生擒口十人余キ兇怒川を渡  
り大原後原高橋右村に退陣せり

日光山  
近郷之圖



或ル新聞中  
本月廿日ノ  
戦事ヲ載ス  
トイヘ氏廿  
日ハ戦争ナ  
カリシ

同廿二日晚走兵三百人獲之國味へ出張右征伐として  
上野前橋等傍作勢勝の三藩人救免予五百人獲りて  
繰出し以申

○閏四月十七日序觸書

今夏諸國大小之林林以於之林佛涅槃之義の法廢止又  
相成以に分別當社僧之輩の還俗之上林之社人等之稱  
号に相轉し林道をめりて之勤仕不致の若くは指交へ  
て是より且の佛教信仰の還俗之義不致の心之車に林  
勤相心之退下中事

但還俗のりの僧位階官互上勿偏に以官位之義の

退之 寺沙信下有之小乃高今之官服の風折焉悞  
不降衣白髪也長用勤仕了致中事

是迄林職相和り居小者之席明之義の之何出マ中  
以之上寺凡個之上以之 寺沙信下有之小事

後四月

書懷

失名氏

漢家自一解權勢逐鹿諸侯如是多、往日嘗君今有否、空  
彈長鈇唱悲歌、



同日月廿三日曉六時以津川津野邊町園家彦を交へ  
 行者共知を以て十人程裏表より押し入る小銃を打  
 かけ白刃を搦り切入し以て折しも短夜の時方あるハ  
 高直の士も幾睡して不意に討たれり忙  
 慌きを以て口不人等海を被りしが若く用意や有  
 るん衆中の士退くは狂衆も一月は切らぬと去る  
 く防戦し遂に賊を邸外に逐出し蹤跡を絶たせし  
 帰らざるもの風多あり是後賊を捕獲しや否や  
 但し右ハ同属國強家来り中より君侯を奪ひ去ら  
 んとく官軍の士と打交り切せしは君侯ハ何方へ

〇を退かせし居合せきとの風説あり

〇補遺

四月廿九日野州へ脱走の兵隊長某の策謀以て同州  
 於賀那野に村地内十文字とて往還有る日光山より  
 東に一里半許隔るい坊石へ喰遠の胸壁を築き大砲  
 を備へ防柵の多き以て胸壁を築き其由より官軍彦  
 振土が勢を以て十人許より押しよせ来るを坊石  
 居合せしは兵士後より二十口不人後陣笠を土手に  
 のせ色き破還の古衣板並木を蔭に隠れ居るに  
 官軍土手を目かけ頻りに砲撃し十分は近するに

分と針を井俣家隊長と見しき騎馬の者を人追と志  
す以て急を打るゆゑ其をまづは憤戦しつゝ官  
軍方即死状三人を斬り七人又及びつゝ同日於今市宿へ  
引返く脱走方かまを其を人のまゝに引返く日荒山へ引揚  
り申す人の信を以て其を察しつゝ衆を教し遂に之  
以て免つ隊長某の腹を割つて

紙數限りあり以て廿一日の戦事を脱き又少しく  
忌諱ありしゆゑ因りその二三を刪去し他日次篇  
に記載せらる



# 内外新報

第 二九 號

定價八分

内外新報第廿九號

慶應四年五月三日

○管系のわらふ子 速白書

味死して其言と以今般洋夷人入 邦殊湯は為免以  
 旨且又井越く管見と去是是近夷人とか革の如く相  
 早しめ以依と止め 皇國西洋と彼是く各別無  
 本邦の四制と以相改所改方端も過く西洋各國  
 法亦採り所國体亦變更以相成以旨傳皆仕以是ハ定  
 之甚深く 聖皇より出以又文武諸臣熟議以  
 左賛成く事と其存以以付彼是事と以之甚以

照入事あるは、はとも程安く、は新なること、は彼夫人入  
 朝、は湯く候は、は是近例無き事、は由、は無き候、は古に唐國之  
 韓、は渤海、は杯、は使入、は於、は例、は有、は之、は以、はは、は由、は唐國  
は之、は所、は接、は得、は有、は之、は以、は天、は朝、は之、は官、は位、は之、は任、は授、は以、は事、は採、は有、は之  
は少、はし、は由、は所、は考、は案、は之、は候、は無、は之、は以、は右、は極、は之、は例、は以、は之、は所、は接、は得、は以、  
 相、は成、は以、は後、は以、は之、はを、は張、は之、は矣、は偏、はも、は矣、は紀、は里、は中、は右、は矣、は又、は後、は未、  
は之、は答、は之、は由、は相、は成、は右、は矣、は其、は故、は以、は之、は方、は今、は之、は形、は勢、は以、は之、は以、は洋、  
は矣、は共、は自、は之、は希、は國、はと、は稱、はし、は為、は大、はと、は極、はめ、は居、はり、は右、は位、は古、はく、は諸、は蕃、  
は未、は孰、はく、は例、は格、は以、は之、は以、は水、は伏、は仕、は右、は矣、は何、は進、は同、は為、はと、は中、は矣、は以、は之、  
 相、は成、は以、は今、は日、は等、は之、は礼、はと、は所、は用、は以、は之、は以、は後、は未、は之、は再、は降、はし、は之、は長、

はと、は稱、はま、は之、は以、は玉、は以、は之、は日、は然、は以、は所、は能、は以、は宋、は朝、は胡、は於、は之、は考、は以、は再、  
は降、はし、は之、は止、はま、は之、は必、は志、は降、はと、は乞、は以、は玉、はと、は中、は矣、は之、は實、は以、は想、  
は像、は寒、は心、は仕、は之、は且、は入、は系、は孫、は偁、は仕、は之、は左、は是、は以、は外、は來、は之、は者、は以、は之、は有、  
は之、は以、は論、はし、は之、は中、は矣、は以、は於、は未、は嘗、は出、は入、は之、は者、は以、は極、は以、は所、は能、は以、は同、  
は何、は者、は來、は之、は以、は之、は由、は包、は荒、は之、は量、はと、は以、は之、は又、は之、は以、は之、は之、は是、は以、  
はが、は主、は人、は之、は職、は以、は所、は能、は以、は矣、は以、は今、はの、は形、は勢、は以、は之、は以、は一、は以、は未、は嘗、  
は之、は差、は之、は以、は之、は宗、は風、は近、は改、は以、は由、は同、は極、は之、は事、は以、は所、は能、は以、は且、は又、は所、  
は國、は体、は所、は愛、は更、は之、は故、は之、は矣、は以、は之、は重、は大、は之、は事、は件、は以、は之、は神、は州、は具、  
は廢、は存、は亡、は世、は一、は舉、は以、は之、は為、は在、は之、は所、は能、は以、は其、は存、は之、は過、は日、は亡、は為、は建、  
は吾、は之、は孰、は以、は之、は以、は漢、は大、は人、は之、は如、は之、は為、は大、は以、は不、は能、は遊、は以、は極、はと、は中、

上は得た是ハ 皇國漢土の之に拘らばシテ 西澤者  
 國と雖も其國君臣等ハ自國を尊大に不仕以てハ  
 其國ハ治を難き者ハ治を以て門巷に細民人と家僕に  
 使ハ者ハ之も其家主を世上由りて尊大切有者  
 以て其政以てハ家治を急ハ況々 皇國ハ之亦年をく  
 皇統連續ハ 所相續所ハ在ハ由全ク荒合して  
 天朝を無限を崇仕ハより如世君臣ハ大分相亂其ハ  
 萬國ハ絶縁仕ハて世尊大ニ致ハ治を又其國尊大  
 以仕ハ於て地を統ハて自然の勢ハ治を然ハ今  
 其尊大ニ相心ハく自ら其國體を破リ以て治を其

國體破れゆくハ其國威自ら萎靡仕ハ被漢土人尊大  
 以て其政ハ其制ハとナリ得とも宋明清杯何事も質  
 易和儀を以て國を保リ夫人に愚弄せし事漢土  
 人ニ備明晰ハ治を以て其思也今こそ全ク漢土ニ覆  
 輒ハ其政ハ其治を以て其思也今こそ全ク漢土ニ覆  
 隣ニ國柄ハ人人情風土も古の之相習を不申ハ其ハ  
 西洋ニ教を里を隔て風土人情も其變ハ其ハ 皇國  
 人として其習を去リ心を變シて西洋人を模倣せし  
 めハ其を變シて不相成氣ハ治を以て西洋ハ其ハ貨  
 利を貪リ其義廉恥を知ハ其ハ帝王極ニ相稱ハ其ハ

由巨商と同縁之者に育ていふ 皇國は仁義勇武  
 と風俗と仕の國といふ事と不同の思ふべき天皇は教を  
 尊し天主を大君大父とし真の君父を小君小父とし  
 假令大罪を犯しといふも天主に媚びざる者に地獄に  
 隨落しんばと相唱いふ事実に君を無し親を無するの  
 教に非ざるは世教蔓延仕へて之を深ふ常も廢弛し仕  
 心志方今之形勢擴張の端に達し雖も是非和親交  
 易に非ざるべし 皇國は治安危に相拘と申し説由  
 實にいひ即今之和親交縁とも治安危に相拘と  
 申すは破れし帝國相違ひ上世迄諸國和親交縁も治安危

合はざるは市況免洋を在國使杯一通外驚く非ざる  
 以て市況免洋を在右に於て和親交縁仕へては戦争に  
 及ばざる事あり 皇國は治安危に相拘と申し説由  
 實にいひ即今之形勢擴張の端に達し雖も是非和親交  
 易に非ざるべし 皇國は治安危に相拘と申し説由  
 實にいひ即今之和親交縁とも治安危に相拘と  
 申すは破れし帝國相違ひ上世迄諸國和親交縁も治安危

物々 聖靈別々先師在天々 神靈以新為對少し由  
 新為懐以不寧々其意々世後以々詳去々制を新為更  
 以々天下有志々者の々形々以々無知々匹丈匹婦々正  
 々之皆 天朝を懐以々守王難報々解と相成々中破  
 逐賊□□大衆を散す以々本々外夷交陸上々親皇以々間  
 是又不伏を抱き々中介夷以々相益著痛々由以々大徳を  
 生し々不中看又内地大衆を生々以々以々ハ救年々以々以  
 しく 皇國を々夷風に相成君父を無し正々を仇し  
 妖邪腥穢礼儀滅不々域以々相成以々必定々其と其後  
 以々同矣以々痛哭泣涕長大息々悔々を以々薰子婦女子々

然を以々天下重々々事件容易に献々仕以々間を出  
 々る戒を犯し僭踰不遜々罪免以々以々由漆室オツマ難免  
 々輩皆女々を以々國事を受以々事古人も是を罪とせ  
 ら身以々以々匿之の存々望以々以々 神女夷狄に流々  
 以々事見る以々思印以々其以々第一狂瞽々管見蕪荒々  
 謀逆等 聖種以々新為其以々其由新為在以々以々鼎復檢  
 刀々戮を更以々事由祈禱々々々々以々清々以々在延樞要  
 以々清方以々由愚衷清憐察以々以々其旨々其清奏 聞其希  
 以々誠惶誠恐死罪死罪謹言

菅原朝臣薰子泣血殊上

薫子の伏見宮の殿上人若江修理左史の女也。社  
蘭と号し又秋葉とも云々年廿三歳草莽と結び和歌  
歌など人より教へ志博學と譽れり。危人競ふと云々控  
かんと思しむと儀海を遊ばしと由事以皆歴服しと傳  
ふと云々想ひ蔡姫附女の亜流也と云々

○

<sup>フロイセン</sup> 索海生オカリン 船又松山藩家族團元江引揚々よし  
今日十二時お海出帆以多し



# 内外新報

第三十號

定價八分



内外新報第三十號

慶應四年五月四日

○後四月十五日出上方より其の来状

當時活人ども尾城へ攻穿し風聞有るに付同家  
人数越々其方引拂ひし相成りし

近藤勇者八日より三條大橋より下河原にわかれ集  
首せしむ

右并札の写

元新選組

近藤 勇事

大和

此の究悪の罪迹乃も有之上此度平御勝治武  
公流山兩所におわく官軍に敵討せし段大逆なる  
まよつと如此令鳥首との如き

大坂所城外近傍の地と擇り豊臣秀吉公所社壇所造  
営有之旨去月六日付仰出の事

○四月廿一日神祇局并兵庫裁判所より所沙汰  
之寫

大政更始の折柄表忠之盛典は行天下之忠臣孝子  
を勸奨せしむるに付之の楠贈正之位中将正成精忠節

美其功烈並に輝き真に千歳の臺人臣子の龜鑑に  
以故今政神号を追益し社壇造営に遊む思食に以  
依之金亦兩所所附する在の事

但正行以下一族之者各鞠躬尽力其功勞不少段返  
賞に遊合祀する有之旨付仰出の事

別紙を通楠社造営に仰出に付之の天下有志  
の者御手傳致度及申出に由を御覧し相成に  
間其地におわく程付之計攝に仰出の事

四月

○四月十八日

大原中納言

室松裁判所總督<sub>註</sub> 仰出美濃飛驒<sub>二</sub>の支配事

林 左門

徴士内國事務局權判事<sub>註</sub> 仰付室松裁判所<sub>二</sub>在勤<sub>一</sub>有之事

梅村速水

右門斷<sub>註</sub> 仰付

東久世中將

英吉利、仏蘭西、オ漏生、伊太里、魯西亞、和、景院、右六ヶ國  
へ<sub>二</sub>為使節<sub>一</sub>渡海<sub>二</sub>致旨<sub>註</sub> 仰出<sub>一</sub>事

四条大夫

同月十九日

新澤裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督<sub>註</sub> 仰出<sub>一</sub>事

安井和介

徴使内國事務局權判事<sub>註</sub> 仰付新澤裁判所<sub>二</sub>在勤<sub>一</sub>有之事

滋野井侍從

同月廿四日

佐渡國裁判所總督<sub>註</sub> 仰出<sub>一</sub>事

山東一市

同月廿九日

徴士内國事務局權判事<sub>註</sub> 仰付箱館裁判所<sub>二</sub>在勤<sub>一</sub>有之事

小野傳捕

右月断事 仰付

松方助左衛門

徴士内国事務局権判事 仰付長崎裁判所 在勤了  
有之事

平松甲斐権介

三河国裁判所執督 仰出遠江駿河了方支配事

藤村四郎

闰四月三日

徴士内国事務局権判事 仰付三河国裁判所 在勤  
了有之事

山本一郎

大橋慎三

右方人の断事 仰付

○水戸上りの来状

因四月十二三日頃上り常々鹿嶋迄色に脱走兵五百八十人程屯集せし十九日以官軍牛場才を出張し細川勢の中百人降参し以て存出降伏し等掛合日及び以て脱走兵の八幡一戦以て蒞堂家より人数多分打取以へば降参し上の皆殺しよてお成との掛念以て未だ承伏致さざる趣風聞に事なり  
但その後掛合相座き江戸へ引還りに相成以よし

○朝廷より大垣侯に御沙汰書く事

其方家未在坂中尚正月三日後不審易討態に立到るに  
 之討討 朝廷如何に有之に止入京の事其方在國中  
 以く不迷取れし歎願の者徳川□□上洛に付俄に供  
 中付兵を以途中不審我關の事起り警入信表以是相  
 在の事終り日朝に玉里余等おれた場合の先手之者  
 一小戦に及以御謀思入の右ハ今々家未之不束に  
 其方又於々の素より 朝廷へ在二之忠勤を呈し中  
 心底に有之謝罪と道相之帰順の事申出に付格別  
 思念を以く之 聞合居隨々東征先鋒に 終對奮勵戮

關仕其実効相顯是以上の功勞以上を若罪亦免  
 相成以旨兼之 御沙汰之趣申有之に事其他隨之御用  
 相勤殊更去る三月九日武州築回狀に於て一戦討し破  
 是実効相立以勿論宸祐出先家未共不束との旨申若  
 大義順遂に不相弁次其方今々家未共への示方不  
 厘以相高望に以付此等御答申に 御付之に格別寛  
 大に 御仁惠を以て紅免の孫に之圓論一定務之忠勤  
 之勵切望之極 御沙汰の事

但此討 官軍戦卒に家未及不意之者本支所寛大之  
 旨趣に準し隊長以上重之に者死一爲之減し永禁廻

丁巳付の其余の刑法に取替るに及ぶに於て相  
海以上姓名及び共太政官代刑法事務局より提出の  
事

附より存する所持の銃砲取揚並有之に及ぶに  
新付の条太政官代軍防局より提出の事

四月

